



2024. 12. 1

地球の木

地球上のすべての人たちと共に生きたい

CONTENTS

- ラオスプログラム JVC山室さん講演会 1~2
- ラオスプログラム 「森に学ぶ2024」学習会 2~3
- 絵本『森の歌がきこえる』 3
- ラオス図書プログラム 4
- 出前講座(鎌倉女学院高等学校/真光寺中学校) 5
- ネパール ニルマラさんのお話会 6
- ネパール大洪水緊急募金のお願い 6
- グローバルeye 南アフリカを訪ねて「格差と多様性」 7
- インフォメーション/年末募金のお願い/活動日誌 8
- 編集後記 8

8年間の駐在を終え、今、伝えたいこと

「ラオスの奪わない暮らし」と「行き過ぎた資本主義」

8月24日、地球の木は日本国際ボランティアセンター(JVC)と共催で講演会を開催しました。スピーカーは8年間のラオス現地駐在を終えて帰国したJVCの山室良平さん。お話は、ラオス農村での支援活動の報告から、8年間で見えてきたこと、そして「どうしたら共有資源を守り持続可能な暮らしができるか」は、ラオスの農民だけではなく我々すべてにとっての大きな課題なのだ、と訴えるものでした。講演会の場にいた32名だけでなく、今こそ多くの人に考えてもらいたい内容でした。山室さんに、ラオスの村の現状、そして広く伝えたいことの骨子をここに寄稿していただきました。

「奪わない」暮らしは豊かで美しい

いつもあたたかなご支援ありがとうございます。2016年からラオスに駐在し、今年4月に本帰国しJVC東京事務所にて活動を続けております。みなさんからのご支援を受け、住民が利用している森や川といった共有資源(コモンズ)が企業による土地収用や住民自身の開墾や過剰な漁などによって奪われないよう、住民自身が利用しながら保全できるよう支援してきました。駐在していて感じたのは、農業の傍ら、自然から日々の糧を得つつそれを守りながら生きる「奪わない」暮らしは持続可能であるだけでなく、豊かで美しいということです。



JVCの山室良平さん

村での実例、村人との話し合いから分かったこと

現在の10村を対象にしたプロジェクト(2025年3月完了予定)でも、村人が自分たちで森や川を守りながら利用するよう支援してきました。2022年に魚保護地区を設置したナンヨン村では「重機や船で川の中で土砂採掘させて欲しい」という企業からの再三の申し出を、住民自らが断るという成果がみられました。大きな川のほとりに位置するこの村では、電気ショックや火薬を利用した違法な漁業が増え、多くの水生動物が姿を消しており、過去に何度か支援プロジェクトとともに魚保護地区の試みをしました。これが失敗してきました。これは、村の有力者と数回話しただけで保全規則や区域を決め、他の村人には通じていなかったり、プロジェクトが終わるとパトロールなどの日当が出なくなって管理がおろそかになったりしたためでした。

一方で、宅地と川の間にある精霊林には高い木々が並び、村人たちは、毎年のように伐採したいという業者からの話を断るなどして長年保全してきました。JVCとの話し合いの中で魚保護地区の失敗例と精霊林を引き比べた結果、村人たちは自分たちがやる気にさえなれば保全できることに改めて気づき、川を子どもや孫のために保全していくことになりました。パトロールなどの管理も続け、現在はより多くの魚を見られるという声も聞かれるようになりました。

自分たち、そしてみんなのためにという意識が大事

ナンヨン村の例からわかるのは、形式上だけ保全をしても効果がなく、「みんなのために保全する」という意識が重要だということです。ゴムプランテーションのために森を伐り、発電ダムのため川をせき止めるといった資源を奪い尽くすような開発とは対照的です。これらは金儲けにはなっても、現地の人々の暮らしや希望を壊してしまいます。さらには環境破壊や気候変動を進め、地球や人間社会が持続可能性を失うことにつながってしまいます。村人たちの保全はこの意味でも重要です。

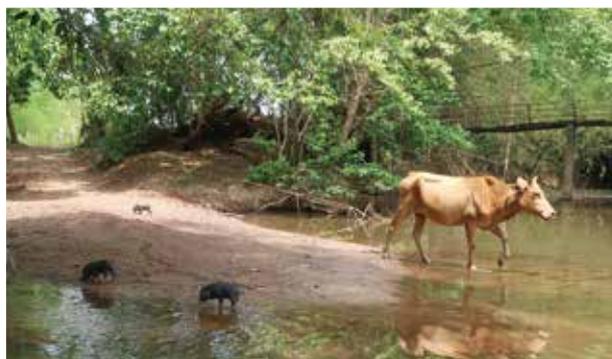
われわれの「共有資源」を守るという意識はどうか

翻ってわれわれ「先進国」の人々は、将来世代を含めたみんなのために共有資源を守るという意識はどうか。そもそも企業が土地取用などをして金儲けができるのも、便利でモノにあふれたライフスタイルのため人々が商品を買うからこそです。重機やチェーンソーが出てくる前は人力で大量伐採などでできず金儲けにもならなかったのが、技術開発や市場の拡大によって可能になりました。そう考えると「共有資源を守る持続的な暮らし」を送るべきはラオスだけではなく、むしろ便利でモノにあふれた社会やそこに生きる人々です。あなたの靴や車のタイヤの原料であるゴムはラオスのプランテーションから来ているかもしれません。

社会のあり方を変えるため連帯しよう

今こそ「奪う暮らし」から脱して、ラオス農村の奪わない、奪われない暮らしに学ぶべきです。とはいえ、われわれが住む日本で自給自足のよう暮らしに戻るとするのは無理があります。ここでキーワードになるのがコモンズ(共有資源)です。コモンズは森や川だけではありません。インターネットなどのコミュニケーションツールや大気、水道、薬品、技術などもコモンズと言えます。今日、世界人口の1%が99%の富を独占していると言いますが、技術や囲い込みによってこれらが独占され金儲けに使われているからです。今われわれに求められるのはコモンズをみんなのために使うよう、社会のあり方を変えるため連帯することです。

(日本国際ボランティアセンターラオス事業担当 山室 良平)



ラオスの森 (JVC提供)

地球の木学習会「森に学ぶ」～10/14 横浜市緑区新治市民の森～



谷戸の風景をながめながら

都会の中の貴重な森を歩き、森と人との関係を改めて考えてみようという学習会「森に学ぶ」第2回目。2/23の第1回目は雨にたたられましたが、今回は晴天に恵まれ気持ちの良い森歩きになりました。この学習会の試みは、森と共にあるラオスの村人の暮らしを支援する地球の木の活動の延長線上にあるもので、当日は、ごく近くの人から湘南や川崎など遠くからの人まで、17人が集まりました。

ラオスという国、そこで森と共に暮らす人々について知ってもらう

木組みの天井がいい感じの集いのスペースで、まずラオスの国について話をしました。クイズをまじえて国のあらまし、歴史、宗教、文化、食べ物などについて。またラオスの人にとって森がいかに身近で大事なもののか、そしてその森が開発の波にあらわれている現状も伝えました。特に今回はラオスの人たちの精霊信仰についてスポットを当て、日本の山岳信仰や、里山の暮らしの中に生きていた身近な神さまにも触れ、「森」をベースに話をつなげてみました。

市民の森を歩きながらお話を聞く

その後、ガイドをお願いした吉武美保子さん(NPO法人新治里山「わ」を広げる会事務局長)を先頭に新治市民の森に入りました。約1時間をかけて、途中立ち止まって話を聞きながら、森の一部を1周しました。横浜市内に47カ所ある市民の森は、市が地主さんから土地を借り、散策できるよう簡単な整備をして一般に公開しているものとのこと。森の入口では、「谷戸」と言う地形に、パッチワークのように田んぼや畑、果樹園、森林、草地、小さな川などが広がる里山の景色を眺めました。谷戸とは水の流れが大地

を少しずつ削ってできた細長い谷のことで、横浜にはかつてこんな景色がたくさんあったそうです。

なかなか急な山道を登りながら、青竹の林では竹の話、落ち葉がいっぱいの所では土の話。そして興味深かったのは近年日本の山を襲っている「ナラ枯れ」の話でした。ナラ枯れは、コナラ属を中心とするブナ科樹木に発生する伝染病で、折しも、人間がコロナでやられている時期に雑木林ではナラ枯れが起きたということ。被害に遭うのは主に高齢化した大木で、これは大きくなった木を土に返そうという自然の摂理ではないかと吉武さんは言います。森の姿が変わっていく今、これからどう森と付き合っていくのか。私たちはその岐路に立たされているのではないかと。

循環型だった里山の暮らし

森と深くつながっていた私たちの生活は、この70~80年の間にすっかり変わってしまいました。雑木林の木から生まれる薪や炭は石油やガスに、建材は輸入材にとって代わりました。たい肥として使っていた下草や落ち葉は使われなくなり、化学肥料が台頭、そして竹から作っていた道具もプラスチック製品に変わっていきました。無駄なくリサイクルされる循環型だった里山の暮らしは今や昔のものとなってしまいました。しかしながら、森を守るには「里山の管理の仕方」が一番いい。すなわち、人が森に入って手を入れ、生き物を大事にしながら適切に利用していく、それが森を守ることにつながるといいます。都市化の波に洗われ横浜の緑地も少なくなりました。それでも緑区は緑被率が41%で、18区の中で1位とのこと。そして更に夏場、新治地区の平均気温は一番低かったそうです。森は気温を下げる！

(ラオスチーム 斎藤 和子)



ラオスについて知ってもらう

16年の時を経て実った絵本『森の歌がきこえる』



2024年7月、絵本『森の歌がきこえる』が偕成社から出版されました。思えば16年前、ラオスの支援活動の中で学んだ、豊かな森、自然への畏敬や「奪わない暮らし」がいかに大切かというメッセージを、幅広い層に届ける方法はないものかと思案し、文字ではなく絵で表現できるのではないかと思い至りました。そんな折、あるNGOの会報の表紙に、絵本作家の田島征三さんの絵を発見しビビッと来たのです。そして、その時たまたま私の職場の近くに田島さんが臨時のアトリエを構えていることを知り、身の程知らずにも直接話を聞いてもらいに行きました。私たちの突然の訪問にもかかわらず田島さんは熱心に話を聞いて下さり、「紙芝居より絵本がいいよ」とも。その10か月後の2010年2月、田島さんも参加してのラオス交流ツアーが実現したのです。

その後計4回取材旅行を行い、ある森の中で村人に聞いた言い伝えがストーリーの元となりました。また田島さんには、ラオスの事を日本人が勝手に描くのではなく、ラオス人と共に作りたいという強い想いがありました。幸いにも、オブジェ作家ルートマニーさんとの出会いがあって、コロナ直前の2019年にラオスのルートマニーさん宅でオブジェの撮影を実施、今年ついに出版に漕ぎつけました。

ラオスの森を舞台にした絵本を作ろうというこの運動は、途中から地球の木の直接の活動から離れましたが、田島さんは私たちの思いを受け止め、絵本の制作に誠実に向き合い完成させて下さいました。また16年の中で多くの方々と出会い、ご協力をいただきました。

命の力強さを感じさせる田島さんの絵と、ルートマニーさんの独創的なオブジェにより、ラオスの森と、そこに棲む精霊ビーの不思議な世界観がページいっぱいに繰り広げられます。ファンタジックな愛の物語であると同時に、自然と人間の関係を改めて問われるようになった今だからこそ、心に響く物語でもあります。

(ラオスチーム 武安 ますみ)



ルートマニーさん(左)と田島征三さん



偕成社 1,760円(税込み)

絵本送付の募金へのご協力ありがとうございました!

絵本の少ないラオスで子どもたちが言葉に触れる機会を増やそうと、NPO法人「ラオスのこども」(略称:ALC)の協力のもと、会報誌や横浜市立図書館でのチラシ配布などを通じて絵本の寄贈と貼付ボランティアを募集し、ラオス語翻訳を貼付した絵本を作成しました。2022年度に活動を始めた当初は、船便でラオスへ絵本を届けることを予定しましたが、コロナ禍以降、ラオスへの船便が再開しませんでした。そのため、航空便で送ることとしましたが、当初予定した経費を大きく上回るため、2024年5月から8月末まで運送費の寄付を募りました。

多くの皆様からご支援をいただき、絵本の発送を完了することができましたのでご報告いたします。



寄付金額:188,500円(目標金額70,000円、達成率269%)

寄付人数:54名

寄付の用途:

① 絵本運送費(240冊):90,000円

NPO法人ALCの現地出張人数が予定より減り、運べなくなっ

た絵本がでたため、予定金額を上回りました。

② 絵本の出版支援:98,500円

運送費を超えた金額は、現地支援の費用(『カンパーとピーノイ』出版支援金)に充てることとしました。

ラオス語翻訳貼付済みの絵本、発送完了しました!

皆さまから発送費のご寄付をいただいたことで、10月29日をもって、ラオス語翻訳を貼付した全ての絵本をラオスのビエンチャンにあるALCの図書館に送ることができました。3年間にわたるご協力に、重ねて感謝申し上げます。



ラオス図書チームの活動報告

① 貼付活動・夏休み企画について<7月25日(木)>

通常の貼付活動に加えて、夏休み企画「ラオスの絵本で遊ぼう!」を実施しました。参加者全員でのラオス語での自己紹介の他、絵本『森の音がきこえる』(田島征三 作・絵/ルートマニー・インシエンマイ オブジエ)について、出版までに深く関わってきたラオスチームの武安さんに田島征三さんとの『森の音がきこえる』の制作秘話を伺い、貼付ボランティアメンバーで図書館司書の山口文子さんに読み聞かせをしていただきました。読み聞かせでは、ラオス図書チームが太鼓やレインスティックで音響を担当し、ラオスの絵本の世界をみんなで遊ぶ時間となりました。

② ラオス現地からの、図書館への絵本到着報告会 <11月7日(木)>

ラオス語翻訳を貼付した絵本がラオス現地のALC図書館に到着して、図書館スタッフや子どもたちからのお礼のビデオメッセージが届きました。これまで貼付ボランティア活動に参加して下さった皆さまと視聴して、子どもたちの笑顔に繋がる喜びを共有しました。その後は、ボランティア活動に参加して下さった感想や、これからの関わりについて率直に皆さんと話し、活動を振り返ることができました。



現地支援『カンパーとピーノイ』の出版

2024年度の現地支援活動は、ラオスで身近なお話である『カンパーとピーノイ』の再販。2024年10月より現地での印刷が始まり、2023年度に支援した『リズムで学ぶラオス語』と同様に、裏表紙には地球の木のロゴマークも入ることになっています。

今後の予定

2022年度に始めたラオス図書プログラム「本と出会い、自分の世界を広げよう」は2024年度の活動をもって終了いたします。それに伴い、3年間の活動の記録を報告書という形で残そうと思います。2025年3月には、ALCと連携をして、発行できるように取り組んでいます。

(ラオス図書チーム 相馬 淳子)

24年目のワークショップは一味変えて — 鎌倉女学院高等学校 —

ネパール・タルー族の家族ゲーム 識字がもたらすもの
～ネパール・タルー族の事例から学ぶ～

2024年6月15日(土)、国際セミナーで高校1年生を対象にワークショップを行いました。このワークショップでは、6名のグループ4組がネパール先住民族の家族になり、字が読めないといふようなことが起こるかを体験します。

昨年までは、「識字」を通してネパールの女性たちが自らの状況と可能性に気づく過程を知ることにより、「識字」のもたらすものについて考えることに焦点を置いていましたが、今年度は、一味違ったワークショップを組み立ててみました。このところ増え続ける在日外国人の状況を表やグラフで紹介し、多文化共生について考えてもらうというものです。

ゲームで「字が読めない体験」をした生徒たちに、実話からつくった紙芝居「デブラニ物語」を見せ、「識字のもたらすもの」についてグループで話し合せて発表してもらいます。次に、焦点をネパールから私たちの住む神奈川県に引き寄せ、日本語ができないために苦労する外国籍の人々、勉強についていけない外国ルーツの子どもたちの事例などを紹介しました。

限られた時間の中での試みでしたが、自分たちの近くにいる外国に繋がる人々の話は、生徒たちの心に響いたようで、多文化共生社会の必要性や自分ができることなど、たくさんの意見が出ました。

(出前講座チーム 乳井 京子)



生徒たちの感想と意見

- ・私は今まで字が読めなくて困るという経験をしたことがなかったので、実際にゲームをしてみて、字が読めないことの辛さと不便さを知りました。
- ・決して相手の文化を否定したり自分の文化をおしつけたりすることなく、異文化を知るチャンスだと思って接することが大切。
- ・性別・身分に関係なく、学校に行くことができる世界が早く来るといい。貧困層から脱出するためにも言語は大切なので、識字教室をもっと広めるべき。
- ・まずは、相手の立場になって考えることだと思います。偏見や先入観をなくして人を尊重する心を常に持っていきたいです。海外に赴いて、実際に現地の人の状況や価値観に触れ、より理解を深められるようになっていけたらいい。
- ・他の言語を自由自在に話せるようになれば、紛争も解決できる。もっと他言語を学びたい。

知らないことを知って楽しい! — 町田市立真光寺中学校 —

小田急線鶴川駅から、バスで少し入った住宅地の中にある町田市立真光寺中学校。私が出前講座のアシスタントとしてこの学校を訪れるのは3年目ですが、地球の木と同校との付き合いは10年近くになり、いくつかのメニューで出前講座を届けてきて現在に至ります。今年の真光寺中の「国際交流の日」は7月13日。テーマは、1年生が「アジアの国を知ろう」、2年生が「世界の国々を知ろう」、3年生が「世界とのつながりを考えよう」でした。地球の木は「ラオスってどんな国?」と題し、1年生のクラスで話をしました。いつも人気の、民族衣装シンの試着や天秤棒での水汲み(運び)体験に加え、今年は絵本『森の歌がきこえる』も読んでみました。

後日、担当の先生から頂いたメールには「普段の生活では想像することのないようなラオスの人々の暮らしに触れ、生徒たちには思うところ感じるころが多かったようです」とありました。

(ラオスチーム 斎藤 和子)



生徒たちの感想と意見

- ・精霊ピーのことを聞いて、ラオスでは自然を大切にしているんだという事が伝わってきました。ドレスの試着や水運びを実際にしてみても、ラオスの生活が想像しやすかったです。
- ・ラオスのあいさつ、食べ物、文化、道具など様々なものを学びました。特に森の事は心に残りました。クイズと、本の読み聞かせもすごく楽しかったです。来年も是非来て下さい。
- ・全く知らなかったラオスの事を知って楽しかったです。ラオス以外の国の事も知りたいと思いました。

ニルマラさんのお話会でパワーをもらう

7月15日に、ネパールのニルマラK.C.さんを招いてお話会を開催しました。ニルマラさんは地球の木と共にネパールの少数民族の識字教室を実施した女性リーダーです。今回、国際環境NGO FoE Japan主催の国際シンポジウムに参加するため来日しました。お話会の会場には、ニルマラさんと関わったことのある会員やネパール人の教育関係者も合わせて31名の参加者で賑わいました。

地球の木との出会いは1994年、ニルマラさんがアジア保健研修所での研修を終えたあと、生協活動の見学をした際、地球の木の乳井さんの家にホームステイをした時です。弁護士を目指していたニルマラさんは、法律よりも現場で働くことが重要と悟り、NGOの活動に参加しました。のちにネパールのトリブバン大学とノルウェイのベルゲン大学の両大学院で学び、「ネパールNGOのアカウンタビリティ*」の研究で2012年に博士号を取得しました。その後はTEWA、ActionAidなどのNGOの代表となり、外国の様々なNGOの人たちと交流しています。好奇心旺盛で、だれとでも認め合い、仲良くなれる性格のパワフルな女性です。

出会いから30年、ネパールに行く時は必ず近況を尋ねあって交流を続けてきました。これからも信頼できるパートナーとして学びあって行きたいと思います。

* NGOのアカウンタビリティ：ドナーや社会に対して、NGOが組織運営や事業実施、会計、情報公開などについて説明責任を果たすこと



地球の木事務所でニルマラさん
(写真中央)を囲んで

① ネパールの課題

ニルマラさんが活動を始めた頃のネパール、特に極西部は多くの課題を抱えていました。子どもの教育に無関心な親、低い識字率、女性への暴力、児童婚、など。さらに、社会的権利に対する無知や、奴隷のように売り買



いされる人々が存在していました。

③ 極西部の活動がもたらしたもの

このような多角的な活動により、極西部の女性たちの多くが識字者となり、子どもたちが学校に行くようになり、活発な女性グループの数々が生まれました。貯蓄グループは積み立てた資金を事業に使い、協同組合として成功しています。多くの女性たちが、野菜栽培、養豚、きのこ栽培、仕立屋などで自立するようになりました。村民議会に選出されたり、村長になる女性も現れました。



② 女性たちは改革の担い手

1997年に極西部で地球の木と共に、タルー族の識字教室を始めました。終了した2009年までに81の教室が開かれ、その参加者は2,025人にのぼりました。参加者は社会的権利や義務、環境、衛生、野菜の栽培について学び、同時に女性グループや貯蓄グループも形成されました。女性たちが経済活動に携わることができるよう、裁縫教室や野菜栽培のトレーニングも行いました。

④ 企業やNGOの社会的責任を追求

現在のニルマラさんは国際NGOであるActionAidNepalの理事長として、引き続き弱者の社会的地位を上げるための活動に精力的に携わっています。中でも注目すべきは、公務員に対して行うEthics and Integrity (倫理と誠実さ)の研修です。役人が高い倫理観を持ち、誠実さを持って行動することがこれからのネパールに必要なからです。また、企業やNGOなどの社会的責任に関する活動について、評価・監査を行い、必要があれば、人々の代わりに訴訟を起こす活動も行っています。

(ネパールチーム 丸谷 士都子)

ネパール支援地が大洪水に!!

9月、前代未聞の豪雨がカトマンズ周辺の渓谷を襲い、支援地インドラサロワール農村自治体と前支援地ロシのあるカブレ郡も甚大な被害を受けました。支援校の子どもたち6名が洪水の犠牲になり、100戸以上の家屋が流されました。カブレ郡全体で78人、ロシで13人の命が奪われ、マーケット一帯が消失。SAGUNI旧事務所、調査の時に通訳をしてくれたムクマヤさんの家も流されました。

これまで「幸せ分かち合いムーブメント」を共に進めてき

た仲間たちは、支援が創り出した「幸せ」を分かち合うだけでなく、東日本大震災、ネパール大地震など災害時には互いに励まし合って「悲しみ」も分かち合ってきました。

再び人々の幸せな笑顔が見られるよう、皆様のご支援をお願いいたします！

詳細は緊急支援募金チラシ、または、ホームページをご覧ください。

南アフリカを訪ねて「格差と多様性」

～ 真の虹の国になるために～

磯野 昌子

どちらが南アフリカの国旗か分かりますか？



サ ッカーやラグビーの好きな方は南アフリカの国旗を見たことがあるかもしれません。正解は左側です。では右側の旗は何の旗でしょう？これは「プログレス・プライド・フラッグ」と呼ばれ、LGBTQのインターセクショナルな多様性のシンボルとして用いられている旗であり、6色からなるレインボーフラッグに、白、ピンク、水色のトランスジェンダーカラーと、茶色と黒の人種的マイノリティを表すカラーがあしらわれています。非常によく似たこの二つの旗は、どちらも多様性を象徴しています。

私 は2024年9月中旬に、フェアトレードの国際会議に参加するために南アフリカ共和国(以下、南アフリカ)第二の都市ケープタウンとその郊外にある、南アフリカで最初のフェアトレードタウンとなったドラケンシュタイン市を訪問しました。南アフリカは南半球にあるため季節が日本とは逆となり、猛暑の日本からは羨ましがられるほど涼しい日々でした。アフリカ大陸最南端にある喜望峰に向かう道程では野生のアザラシやペンギン、ダチョウに遭遇。大自然あり、ケープタウンの大都会あり、多様な人種が混在し、貧富格差が顕著に見られる国でした。



南アフリカ初のフェアトレードスクールの子どもたち



のですが、今もケープタウンや郊外には「タウンシップ」があちこちに存在しました。そこでは「仕事もせず、学校にも行かない黒人たちを福祉で面倒を見ている」との説明を受けたので、私は当初「タウンシップ」とはスラムであり、社会福祉によって困窮者支援が行われているのだと思っていたのですが、それがアパルトヘイトの黒人居住区だったことを知り、歴史はまったく変わっておらず、アパルトヘイトは終わっていないことを実感しました。

一 方でそこを案内してくれた市の職員は、ビバリーヒルズを思わせる高級住宅地に住んでおり、そこには庭付きプール付きの豪邸が並んでいました。近隣には美しい川が流れる大きな公園があり、朝にはジョギングや犬の散歩をする人たちの姿がありました。人種的には白人かカラードと呼ばれる混血の住民が多く、その風景だけを見ていると南アフリカはなんて豊かな国だろうと思われました。南アフリカ初のフェアトレードタウンとなった市の職員は「世界で一番格差のあるこの国で、豊かな層に生まれてきた私は“フェア”な社会をつくるために取り組む責任があると思う」と話していたことが印象的でした。

南 アフリカと言えばアパルトヘイトという人種隔離政策があったことで有名です。植民地の歴史に由来する様々な差別立法を背景に1948年に確立し、人種間の結婚の禁止、交通機関やレストラン、学校などの公共空間での人種隔離、投票権や労働賃金、教育機会、居住区などあらゆる面での黒人差別が半世紀にわたって公然と行われました。しかし、1994年のアパルトヘイト撤廃から既に30年が経ち、私はアパルトヘイトを過去のことだと思っていた

反 アパルトヘイト運動に人生を捧げたノーベル平和賞受賞者、ネルソン・マンデラ元大統領は南アフリカを「レインボー国家」と呼び、「貧困は自然なものではなく、人間が作り出したものであり、人間の手で克服し根絶できるものだ」と言っています。複雑な歴史によって作られた人種や文化の多様性を保持しながら、貧富の格差や差別という人為的につくられた違いを乗り越えることで初めて、この国は真の「虹の国」になれるのだらうと思います。

年末募金2024

あなたの手で地球に希望の種をまこう!

皆さまの日ごろのご協力で心より感謝申し上げます。地球の木では、現地での対話と交流を大切にネパールやラオスの自立支援を継続しています。国や民族、文化の違いを超えて、より良い未来をつくるために、皆様からの温かい支援をよろしくお願い申し上げます。

■募金の宛先
【郵便振替】の場合
ゆうちょ銀行

1口
1,000円から



- ・口座番号 00260-5-14129
- ・口座名義 「特定非営利活動法人 地球の木」

詳細はホームページ、または、チラシをご覧ください。
年末募金は、2025年1月31日まで受け付けております。

地球の木講座2024 のお知らせ

カタツムリの知恵と脱成長

～豊かさや幸福を問い直す～

「脱成長」の視点から今日のグローバル社会における幸福のあり方について語っていただきます。

日時 2025年3月22日(土)午後
場所は未定

講師 中野佳裕さん
(立教大学社会デザイン研究科
特任准教授)

寄付領収書について

地球の木へのご寄付は、所得税等の控除対象になります。

寄付金控除を受けるためには、地球の木が発行する「寄付金受領証明書」(領収書)を添えて、確定申告する必要があります。2024年に受けたご寄付の領収書は、2025年1月下旬に郵送でお送りいたします。

また、地球の木ではサポート会員の会費が控除対象となります。サポート会員の領収書はお申し出いただいた方のみお送りしておりますので、必要な方は事務局までご連絡ください。

新スタッフ紹介

動きやすい事務局になるよう新戦力として加わった尾崎友加さん。会報作成も支えてくれます。



活動日誌(6月～11月抜粋)

- | | |
|---|--|
| <p>■6月</p> <ul style="list-style-type: none"> 8日 第1回理事会 14日 デポー展示会(東戸塚) 15日 出前講座(鎌倉女学院高等学校) 20日 ラオス図書貼付ボランティア <p>■7月</p> <ul style="list-style-type: none"> 9日 デポー展示会(つつじが丘) 13日 出前講座(真光寺中学校) 15日 ネパールモニタリング報告会・ニルマラさんお話し 20日 第2回理事会 25日 ラオス図書貼付ボランティア・読み聞かせイベント <p>■8月</p> <ul style="list-style-type: none"> 3・4日 d-lab(開発教育研修会) 10日 ラオス図書貼付ボランティア 24日 JVC山室さん講演会 <p>■9月</p> <ul style="list-style-type: none"> 2日 デポー展示会(ほんもく) 9日 第3回理事会 | <p>■10月</p> <ul style="list-style-type: none"> 3日 ラオス図書貼付ボランティア 5日 第4回理事会 6日 多文化フェア@なかやま 4日 学習会「森に学ぶ」 28日 中間監査 <p>■11月</p> <ul style="list-style-type: none"> 1日 第5回理事会 1・2日 オルタ館フェスタ 7日 ラオス図書貼付ボランティア(報告会) 10日 かまくら国際交流フェスティバル 17日 出前講座(神奈川区多文化共生ラウンジ) 23日 東日本大震災復興まつり 30日～12月1日
あーすフェスタかながわ(本郷台) |
|---|--|



◆郵便料金値上げの秋。私は「葉っぱの手紙」を出すのに凝っていた時期がある。「スルメに字を書いて出してもOKらしいよ」とどこかで聞いたので、葉っぱに紙を貼って出してみることに。それでも一抹の不安があり郵便局に持っていき、「はい、構いませんよ。規格外で200円です」と事も無げに言われた。ゴムの木から始まって、柿、ハクモクレン、カクレミノ、アオキなどなど。私は葉っぱのハガキを友人に飛ばし続けた。しかし、受け手は送り手程、面白がっていないように思えて、自然消滅。(K.S)